

ともに暮らす。 ともに生きる。

大河原 伸さん・多津子さん

「田村市
船引町」

田村市船引町で有機農業を営む夫妻
県内有機農業の先駆的な存在でもある
手作りの人形劇『劇団赤いトマト』主宰

自分たちの農業に誇りと喜び
人形劇を通して
その想いを語り続ける



大河原夫妻に作物は、手間ひまかけられ、よく育ったものばかり



夫妻が演じる人形劇には、楽しい中にも大切なメッセージが込められている。「観客の子供たちとふれあって、私達も大きなエネルギーをもらっています」

数代前は庄屋だったという大河原家。葉たばこを中心に栽培していたが、需要減に伴い将来を考えなければならなくなり、若き担い手の大河原伸さんは「初めて農業を真剣に考え向き合った」という。農業をやり続けることを選択し、その方法として有機栽培に取り組んだ。畑の一部で無農薬や有機栽培を開始したのが今から28年前のことだった。伸さんが「青いうちは絶対に出荷しない」というこだわりを持つ完熟トマトを始めとする全ての農産物は、現在も購入契約者および一部の野菜販売所でのみ販売されている。

伸さん・多津子さん夫妻が主宰する『劇団赤いトマト』の旗揚げは、二人が結婚した昭和60年に遡る。夏に飯館村で行われた黒テントのワークショップに参加した二人。伸さんは発の体験に「芝居って面白い」と興味津々、学生時代に人形劇の経験があった多津子さんは「生人形劇をやりたい」という思いを強めた。そして、三ヶ月後の11月に、近所の人を招いての初公演。演じる楽しみ、人を楽しませる喜びがあふれた。

次第に上演依頼が舞い込むようになり、各地へ出かけるようになる。

1回の公演で、大抵2本の人形劇を上演する。幕間には、伸さんの楽器演奏や手品も加わる。昔話からとった農の話やオリジナルのストーリーを多津子さんが脚本化し、演出は二人で練り上げる。わかりやすく温かな題材、ユーモアにあふれメリハリのきいた展開、ダイナミックで躍動感いっぱいの動きと声。子どもはもちろん観ている誰もが、グイグイと引き込まれていく。

旗揚げから22年、「農家の自由性があるから続けられたと思う。人形劇という共通点が、互いを思いやる心のつながりになっている」という大河原夫妻。『赤いトマト』を続けることはもちろんだが、伸さんは「後継者ができたら、ルワンダに行き農業指導をしたい。」と、多津子さんは「言葉に頼らない人形劇を、寂しい思いをしているベトナムの子供たちのために演じたい」と、将来の夢を語ってくれた。



多忙な日常をまるで子供が遊びに熱中するように、生き生きと過ぐ大河原 伸さん・多津子さん。農閑期といえど、農家に休みはない。「有機農業も人形劇も10年目ぐらいから本当の成果が出て来ました。今やっていることが土の中に雨がしみ込むようにしみ込んでゆく。10年後のために今やらないとダメなんです」